

### \*東京天文台にあった3台目の90mmバンベルヒ子午儀の所在判明

1953年10月に発行された東京大学東京天文台75周年誌「歴史と現況」に当時の主な機械としてゴーチェ子午環(口径20cm、焦点距離310cm)、レプソルド子午儀(口径13.5cm、焦点距離212cm)に続きバンベルヒ子午儀3(口径9cm、焦点距離100cm)と記載がある。90mmバンベルヒ子午儀は3台あったのであるが、2008年にアーカイブ室が発足し、過去の貴重な望遠鏡などの調査を始めた際、90mmバンベルヒ子午儀は2台しか発見できなかった。75周年記念誌には、続いてバンベルヒ子午儀2(口径7cm、焦点距離70cm、口径5cm、焦点距離50cm)と記載されており、これらも同時に発見され、90mmバンベルヒ子午儀1台が行方不明であった。アーカイブ室は東京天文台から流出し、行方の分からない器械の探索を進め、ブラッシャー天体写真儀、AFUカメラ(人工衛星追跡望遠鏡)、太陽単色写真儀などを回収するなどかなりの成果を上げていた。2014年8月19日に国立天文台を訪ねて来られた国土地理院広報広聴室長の豊田友夫氏から「国土地理院に東京天文台と書かれた大きな子午儀がある」と聞かされたのである。そこで、子午儀資料館に案内し展示してある90mmバンベルヒ子午儀をお見せすると、これと同じものだというのである。

国土地理院が地理調査所と言っていた頃、東京天文台と測地関係では共同で観測・測量をすることも多く、東京天文台を前身の一つとする国立天文台にも「地理調査所」と書かれた木箱に入った経緯儀が存在している。豊田氏に天文機器資料館に展示してある経緯儀、収蔵庫のその地理調査所と書かれた木箱などをご覧いただき、国土地理院にあるという90mmバンベルヒ子午儀の写真をお送りいただく約束し、この度その写真1、2が送られてきた。



写真1

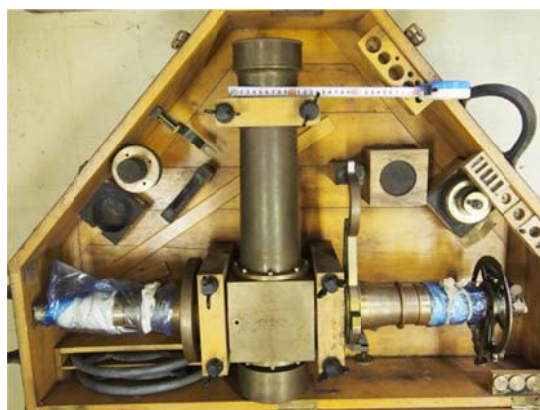


写真2

木箱は、国立天文台にあるドイツから届いた輸送箱と同じである。表書きに「携帯用子午儀 東京天文台」と書かれており、東京天文台にあった3台の90mmバンベルヒ子午儀の一つであることは確かである。豊田氏のメールには鹿野山で使われたようだと言われている。

る。

国立天文台には平地に設置された一等三角点「三鷹村」が多摩川の河岸段丘の国分寺崖線から一番遠い北端、また大沢の崖地から離れた場所に設置されている。一等三角点は高い山の頂上に設置され、平地にあるものは非常に珍しい。この一等三角点は関東大震災の後、麻布にあった旧東京天文台のメルツ・レプソルド子午環のあった場所が日本の経緯度原点になっているが、その場所は急峻な崖地近くにあり、再び関東大震災級の地震があれば失われる心配があり、日本の経緯度原点の予備点として設置されたものである。

この一等三角点「三鷹村」の位置測定が、堂平山、筑波山、東京、鹿野山、連光寺村、丹沢山の既設の一等三角点から観測されたと「一等三角点ノ記 三鷹村」に記されていることから国立天文台内にある日本の経緯度原点の予備点の位置決定に鹿野山で使用されたと想像される。

同時にお送りいただいた写真は次の4葉（写真3、4、5、6）である。



写真3



写真4



写真5



写真6

90 mmバンベルヒ子午儀は、3個の革張りの木箱に収められているが、それぞれ相当な重量である。これを鹿野山山頂に上げるには相当の強力を雇ったに違いない。国立天文台にある90 mmバンベルヒ子午儀は東京天文台が三鷹に移転して以後、1952年まで日本の時刻決定に使用されたから、携帯用として持ち歩かれてはいない。50 mm、70 mmバンベルヒ子午儀

はあちこちに持ち歩かれ経度決定に使用されたという文献がある。

写真7は、写真3の刻印部分の拡大写真で、国土地理院にある90 mmバンベルヒ子午儀の刻印である。

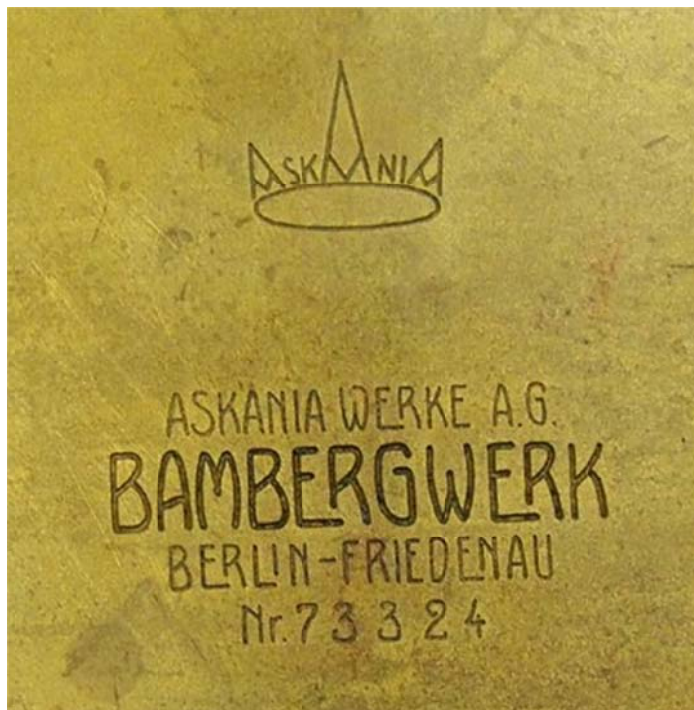


写真7 刻印

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)